

## 熊本県女性薬剤師会研修会報告

熊本赤十字病院 平井 友子

日時：平成 28 年 9 月 4 日 15:30～18:00

場所：熊本大学薬学部 宮本記念館

講師：ひまわり在宅クリニック 理事長・院長 後藤慶次先生

住み慣れた地域社会の中で、安心して療養生活を送るためにはそれを支援する在宅医療の提供が不可欠である。現在、在宅医療特化型診療所を開設し約 100 名の在宅療養を支援している現状をお話していただいた。

最近の厚生労働省の調査によると、終末期を自宅で過ごしたいと希望している人が 6 割以上いる一方で、それと同程度の人が自宅で最期まで療養するのは困難であると考えている。その理由の多くは家族への負担を憂慮したものである。まだ在宅療養を支える医療機関や体制が不十分であるという問題はあがるが、患者や医療者の在宅医療に対する誤解や認識不足が原因となっている場合もある。より良い在宅医療を提供するために医療福祉従事者間のコミュニケーションを密にして顔の見える連携を構築することが大切であり、多職種のカンファレンスや研修会、施設スタッフへの教育等を通して地域の在宅医療の質の向上に取り組んでいる。

在宅緩和ケアとは病气や障害を抱え治療が困難になった時、苦痛なく住み慣れた自宅で過ごしたい、願わくば最期まで、との希望をかなえる医療・ケアである。それを実現するためには患者や家族と在宅療養の目的や治療・ケアの方針を共有し、24 時間の緊急訪問を保証して安心を提供することが重要である。それには訪問看護ステーションをはじめ地域の医療資源との連携が必須であり、多職種のチームで関わり支えることが不可欠である。薬剤師も当番制の導入など緊急時に訪問が可能な体制作りが求められる。また緊急入院に対応できる病診連携を整えて、家族の負担軽減を配慮しながら継続して患者と家族を支援することが必要である。

緩和ケアの中で死を目前にした人へはご自身の希望を支え、人生に対し納得や和解を感じる事がケアに繋がる。それは患者がくり返し話す話を穏やかに伺うことでかなえられる。患者にはそれぞれに死の迎え方があり、それらを尊重して支えることが大切であり、想いをかなえられるチーム作りが必要である。また家族の気持ちにも寄り添い穏やかな最期を迎えられるようにサポートをし、死別後も共にグリーフケアを行う。そのことで家族の心の中には死を受け止め、命が受け継がれることを感じられ、その後生きていくことが容易になるという状況が生まれる。

後半に写真と共に事例が紹介された。そこには終末期にもかかわらず穏やかな表情で自分の人生を受け入れて達観しているような患者と、その傍らには辛いながらも患者の気持ちに寄り添う家族がいて、ケアによって支えられながら自分の居場所で安心して療養生活が送られていると感じた。

最後に「患者と家族を支えているつもりがその生き方や思いに触れ励まされ力づけられて自分が生かされていることに気付く。人は互いに支えられて生きており、人の振る舞いや想いは受け継がれていくものであり、最期の時を納得のできる形を見守っていきたい」と締めくくられた。